# 久留米市文化章受章者（24名、2団体） ※S48～S51は文化功労章

| NO | 表彰年度 | 氏名 | 分野 | 功績の概要 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S48 | 丸山　豊 | 文学 | 中学時代に北原白秋賞を受賞し、早くも詩人としての才覚を見せ、軍役時代は『未来』を出版、戦後の新聞連載『月白の道』は多くの感動と反響を呼んだ。他の作品でも『愛のデッサン』、『白鳥』は永遠の美の価値と評された。郷土の抒情をうたいあげる團伊玖磨作曲の「筑後川」の作詞など、たゆまない創作活動は現代詩人界で稀少なものである。医業のかたわら数多くの人材を文学界に送り出し、新人育成にも尽力された。また 50 数校に及ぶ校歌を作詞され、心の故郷としての文化風土に末永く無形の薫陶を残された。 | 故人 |
| 2 | S49 | 井手　一郎 | 医学 | 医学の進展に献身され、地域住民の保健と福祉の向上に貢献された。<br>本格的な救急体制による医療活動、新生児センターにおいては、未熟早生児の蘇生哺育、また人工腎臓センター設置による急性・慢性腎不全、薬物中毒患者の治療及び社会復帰さらには高度な看護技術養成のための高等看護学院を創設するなど診療体制の充実向上に尽力された。 | 故人 |
| 3 | S50 | 菊竹　清訓 | 建築 | 都市構造における徹底的人工化と建築技術における技術の極限化、代謝建築（メタボリズム）等を基本的理念としたユニークな建築様式を探求し、昭和38年に発表した「出雲大社庁の舎」は日本の伝統を現代建築に取り入れた画期的作品として各国建築家から絶賛され、アメリカ建築家協会から汎太平洋建築賞、世界に30名といわれる名誉特別会員の称号が贈られた。久留米市民会館、有馬記念館、文化センターの設計など、故郷のコミュニティ形成の広場を意図した空間創造にも尽力された。 | 故人 |
| 4 | S51 | 岸田　勉 | 美術評論 | 昭和 20 年に発起人となり坂本繁二郎を委員長に西部美術協会を結成。翌21年に美術雑誌『西部美術』を創刊し、さらに久留米連合文化会の前身となる「久留米文化の会」を結成するなど、戦後の文化復興に情熱を傾け、美術文化の啓発者として活躍された。幅広い美術史研究の中でも、中国・北宋の絵画、九州の南画、さらに郷里出身の青木繁、坂本繁二郎をはじめとする日本近代洋画の研究者として著名で、全国に向けた美術評論の展開にも顕著な功績を残された。 | 故人 |
| 5 | S52 | 根城　晝夜 | 学術 | 医療の充実と保健衛生思想の普及に精励され、医学教育及び医学の発展に尽力されるなど地域福祉社会の向上に貢献されるとともに、沖縄諸島の無医村地区やネパールに医療援助のために派遣されるなど、診療奉仕活動を実践された。<br>久留米大学附設高等学校の充実並びに中学校を設置し、教育の一貫性を図り人間性豊かな教育に取り組まれた。 | 故人 |
| 6 | S53 | 河北　倫明 | 芸術 | 美学及び美術史の学問的探究と近代日本美術史の研究に精力的に取り組まれ、多くの美術評論を発表されるなど、常に日本美術文化思想の向上と発展に貢献された功績は絶大なものがある。日本美術全体を通じて深い理解と造形を備えた氏の数多い研究評論の中でも、郷土久留米が生んだ画家である、青木繁と坂本繁二郎についての評論は特筆すべきものである。京都国立近代美術館館長の要職の他数多くの委員を歴任され、日本美術評論家の第一人者として芸術文化の発展に尽力されている。 | 故人 |
| 7 | S54 | 内野　英實 | 芸術 | 昭和 26 年に西部示現会を結成して九州・山口地方の絵画振興に尽力された一方で、地域の文化サークルや市内小・中学校、高等学校、西日本短大の美術教師を務め、地域社会における美術的啓発ならびに教育指導にも携わられた。また、昭和 24 年に発足した久留米連合文化会の中心的存在として、長年にわたって地域芸術文化の振興に貢献された。市と連合文化会の共催による総合美術展、現代九州彫刻展の企画運営にも情熱を注がれ、若き作家の育成と地域文化の新しい土壌確立など久留米市の地域文化の振興に大きな功績を残された。 | 故人 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 8 | S54 | 納戸　徳重 | 体育 | 400m 走及び 800m 走の日本記録を更新し、日本陸上競技選手権大会の 400m 走で三連覇（1922 年から 1925 年）、1924 年パリオリンピックに出場するなど陸上選手として活躍された。その後、スポーツ担当記者として福岡日日新聞社（西日本新聞社の前身）主催のスポーツ行事に携わり、九州一周駅伝を創設するなど、九州のスポーツ振興に尽力された。 | 故人 |
| 9 | S55 | 豊福　知徳 | 美術彫刻 | 戦後、彫刻家富永朝堂氏に師事、日本の伝統的な木彫を学び、昭和30年新制作協会展にて「父子像Ⅰ」「父子像Ⅱ」が新作家賞を受賞、昭和32年新制作協会会員となり、その後同協会展で「黄駒」（新制作協会賞受賞）、「漂流」（高村光太郎賞受賞）など動勢と情感をひそめた内包豊かな快作によって注目をひいた。昭和35年のベニス・ビエンナーレ展への出品を機にイタリア・ミラノ市に居住、抽象的な穿孔様式の作風を開拓した。現代の日本を代表する国際的彫刻家として文化興隆に寄与された功績は多大なものである。 | 故人 |
| 10 | S56 | 脇坂　順一 | 医学 | 学問に対する厳格な姿勢と人間尊重を基調として、地域住民の保健福祉の向上に尽力されるとともに、内臓外科医学の権威者として医術の進歩発展に大きく貢献されるとともに、久留米大学教授として無医村や医療過疎地域などのへき地医療問題に取り組まれた。特にネパールにおける医学調査・診療の功労に対し、秩父宮記念学術賞を受賞された。 | 故人 |
| 11 | S57 | 野田宇太郎 | 文学 | 昭和7年、久留米の同人誌『街路樹』に参加し詩人として活動をはじめ、昭和 8 年に詩集『北の部屋』を発表。昭和 9 年に久留米の丸山豊氏らと共に「ボアイエルのクラブ」を結成し、“久留米抒情派”と呼ばれる名高い詩の世界を生むに至った。九州詩壇における珠玉の作品を集めた『火枝』、『抒情詩』を編集発行し、上京後も出版社の編集者として活躍され、戦中の困難な時期に文学の灯を守られた。日本郷土文芸の発掘、保存にも力を注ぎ、日本を代表する詩人・文学者として優れた業績を残された。 | 故人 |
| 12 | S58 | 山本　傳 | 教育学 | 義務教育諸学校教職員の育成指導に務められ、義務教育の充実、向上に貢献された。この間、福岡学芸大学助教授、教授、福岡教育大学長などを歴任されるとともに、職業教育理念、農業教育のあり方について数多くの論文を発表するなど、農業教育の確立、産業振興に尽力された。また、昭和 51 年に福岡教育大学長を退任以来、信愛女子短期大学講師として久留米市在住の子女の教育に精励された。 | 故人 |
| 13 | S59 | 藤田　吉香 | 絵画 | 東京美術大学卒業後スペインへ留学。昭和 41 年に帰国後、同 42 年の国展に出品した「空」が国画会サントリー賞を受賞、作品は久留米市民会館に展示された。昭和 45 年、「春木萬華」で安井賞を受賞して以降は、現代具象絵画の世界でひときわ風格と魅力を放つ存在となり、特に昭和56年に「牡丹」で栄えある第1回宮本三郎記念賞を受賞されたことは、本市にとっても喜ばしいことである。東京芸術大学講師や地元の西日本美術展審査委員を務められ、後進育成と郷土画壇の発展に尽力された功績も大きい。 | 故人 |
| 14 | S60 | 東　善蔵 | 造園 | アメリカのロスアンゼルス市に『樹里会』と呼ぶ日本造園協会の支部組織ができるなど広く海外にも影響を及ぼし、造園技術の向上に大きく貢献された。<br>日本庭園、茶庭など数多くの名園の設計施工を手がけられ、その技術の普及にあたられ、現在の植木造園業発展の基礎を築かれた。 | 故人 |
| 15 | S61 | 中川　洋 | 医学教育 | ウイルス学の分野において、我が国における草分け的な存在であり、ウイルス精製で電子顕微鏡像を世界で初めて明らかにするなど、我が国の伝染病予防に尽力された。<br>日本細菌学会、日本ウイルス学会、日本感染症学会において要職を務められ、さらに日本学術会議会員として活躍されるなど日本の医学界をリードした。 | 故人 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 16 | S63 | 王丸　勇 | 医学教育 | 九州医学専門学校（現在の久留米大学）教授として、医師の養成に尽力された。その間、医学部長、准看護学校長、附属病院長等の要職を歴任して大学運営にあたり、久留米大学の発展に貢献された。医学外においても数多くの著書を執筆されるなど広く文化面における活動も顕著である。 | 故人 |
| 17 | H元 | 田村　輝夫 | 造園振興 | つつじのさし木基礎研究を行い、その技術により筑後地方を日本有数の植木・苗木の産地とするとともに、その振興発展に貢献された。<br>また、農学博士として育種者の園芸指導、つつじ新品種の育成指導を行うとともに、海外の品種導入も行い、アメリカ、ベルギー等にアザレア品種を紹介するなど、国際的にも活躍された。 | 故人 |
| 18 | H2 | 古賀　幸雄 | 文化振興 | 地方史の研究活動に鋭意取り組まれ、特に市史編纂委員会の長期事業において、「久留米市史」全13巻を刊行する本格的な修史事業の中心的役割として手腕を発揮され、本市の文化振興に多大に寄与された。その間、久留米地区老人大学運営委員、久留米市公民館運営審議会委員等を務められ、社会教育活動にも活躍されるなど、広く郷土文化の興隆に貢献された。 | 故人 |
| 19 | H3 | ブリヂストン吹奏楽団久留米 | 文化振興 | 昭和45年の第18回全日本吹奏楽コンクールで初の金賞受賞以来、通算16回金賞を獲得され、さらには昭和59年に福岡県教育文化功労者賞を受賞されるなど、アマチュア吹奏楽界を代表する吹奏楽団として、高く評価されている。地域活動にも力を注がれ、くるめ水の祭典のパレード参加をはじめ、市の公式行事や各種イベントでの演奏活動に積極的に参加され、地元の音楽団体や小・中・高等学校等の吹奏楽に対する指導・助言もされるなど、地域の音楽水準のレベルアップに寄与されている。 | |
| 20 | H4 | 國武　豊喜 | 科学技術 | 「生体の分子組織の基本となる『生体膜』が持っている、高度な化学組織の機能と同じ程度に精密な組織構造をもつ人工材料を作り出す基礎技術」の研究に精力を注がれ、昭和41年、「生体膜」の分子を参考にして合成した有機分子を用いて、世界で初めて「合成2分子膜」の形成に成功。「生体膜機能の解析・利用技術の開発に関する研究」の世界的権威として、研究推進の国際的なリーダー役を果たされた。 | |
| 21 | H8 | 團　伊玖磨 | 音楽 | 昭和26年に「久留米市の歌」を作曲依頼、久留米にゆかりの数々の作曲・演奏活動を続けられ、本市と強い絆で結ばれている。昭和43年に久留米音協合唱団創立5周年を記念して作曲された合唱組曲「筑後川」（丸山豊作詞）は、初演と同時に多くの人の心に受け入れられ、日本中に広がり、合唱曲楽譜の大ベストセラーになっている。<br>久留米大学の校歌やブリヂストンの社歌、石橋文化センターの歌を作曲されるなど、久留米地域の音楽文化の振興に尽くされた功績は計り知れない。 | 故人 |
| 22 | H13 | 三島　重人 | 学術振興 | 筑邦銀行代表取締役頭取や久留米商工会議所会頭、社会福祉法人久留米市社会福祉協議会長、久留米大学理事長等の要職を歴任するなど、久留米経済界の振興発展に尽力されるとともに、久留米大学の運営に寄与し、高度医療、学術研究都市としての基盤づくりに努められた。また、久留米文化推進協議会の役員として芸術文化活動の活性化に務め、地域に根付き発展するための土壌づくりと育成環境作りに取り組むなど、文化興隆に貢献された。 | 故人 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 23 | H16 | 久留米<br>連合文化会 | 文化<br>振興 | 文芸部門・美術部門・芸能部門・華道部門・茶道部門の5部門に23の部があり、各部門で優れた実績と力量を有する会員約830名を擁し、本市はもとより筑後地域の芸術文化振興を牽引している。会員各自が、専門の分野を通じて地域の芸術文化水準の向上と人材の育成、さらには本市の芸術文化風土の醸成に大きく寄与し、地域文化の発展に貢献されている。本市の芸術文化施策にも参画され、文化都市としての発展に不可欠な存在となっている。 | |
| 24 | H19 | 森山　虎雄 | 文化<br>振興 | 全国重要無形文化財保持団体協議会副会長、重要無形文化財久留米絣技術保持者会長などの要職を歴任され、「久留米絣」の手括りと藍染の技術保持者として、伝統的技術の保存及び継承に努められた。<br>さらに、後継者の育成と技術の向上に尽力されるとともに、パリやロンドンで開催された日本伝統工芸展に我が国を代表する職人に選ばれ、制作を実演されるなど、筑後地域の伝統文化の普及に貢献された。 | |
| 25 | H25 | 藤井　郁弥 | 芸術<br>振興 | 昭和58年、7人組グループ「チェッカーズ」のリードボーカルとしてデビュー。グループ解散後はソロ活動を開始し、作詞作曲した「TRUE　LOVE」は200万枚を越す大ヒットとなった。<br>音楽以外でもコンピュータグラフィックスを駆使した作品を制作し、FUMIYART（フミヤート）の名称で個展を開催。平成11年に「くるめ市民カード」のデザイン、平成12年に南筑高等学校の制服のデザインを手がけた。<br>平成17年2月の1市4町の合併の際に新久留米市の歌「ふるさとのささやき」を作曲、久留米市へ多大な貢献をされた。 | |
| 26 | R6 | 帯木　蓬生 | 文学 | 明善高校出身の氏は、昭和50年に「頭蓋に立つ旗」で作家デビューし、その後も社会の不条理と閉鎖された精神病院の患者の苦悩と回生を描いた「閉鎖病棟」が、第8回山本周五郎賞を受賞するなど、数々の文学賞を受賞。<br>久留米の時代背景が反映された作品も発表し、それらの作品には、浅井の一本桜やハゼ並木、耳納連山など久留米の自然が繊細に描かれ、深い愛郷心がうかがえる。<br>そのほかにも、福岡県内の学校へ著書を多数寄贈されるなど、文化芸術の向上発展に大きく貢献された。 | |